

障害がある子どもの「言葉で伝える」力を伸ばす指導

秋本 公志

(静岡県立中央特別支援学校)

KEY WORDS: 発達障害, 言葉の指導, 思考力

(問題と目的)

ことばは、思考や論理、感性や情緒、対話や議論の基盤であり、特に「ことばによる表現」は、将来社会で生活していく上で、周囲と分かり合うためには、欠かせないものである。

しかし、肢体不自由がある児童生徒らは、①姿勢や動作(発声を含む)の不自由により、話したり書いたりする技能が直接阻害される、②感覚や認知の特性により、複数の情報を同時に処理することが難しいため、必要な情報だけを拾い上げて述べたり、複数の事項のつながりや因果関係を頭の中で整理して話の全体像を構築することがうまくできなかつたりする、③経験や体験の少なさ等により、話したり書いたりする内容が少なく、「ことばによる表現」を獲得することが難しい状況にある。

このような児童生徒たちに対しては、発声や書字の補助手段の活用や直接経験の機会の確保などの支援が行われているが、重要なのは、それらの経験を表現する際に「話題を整理する」ことである。

話題が整理できていないと、児童生徒らが「何を」伝えたいか分からなくなったり「本当に伝えたいこと」が伝わらなかつたりしてしまい、成功経験を積み重ねることが難しくなってしまうと考える。

「話題を整理して話す」ためには、ア「事実」「意見」「理由」「根拠」などの要素に分けて考えること、イ要素を順序だてて相手に分かりやすく構成するという技能が必要である。そこで、長谷川(2008)が開発した、談話を概要、具体的内容、感想の三要素としてまとめる「三文スピーチ」の手法を使い、その経過を記録して話した内容の検討を児童生徒らと行うことで、彼ら自身が使っている「ことば」を「周りに正しく伝える」方法を考えさせ、「話題を整理して話す」技能を身につけるための支援としたいと考えた。

(方法)

対象 特別支援学校に在籍する中学部生徒1名

時期 平成26年4月～12月

場面 国語の個別指導(原則週1回)

手続き: 本児に身の回りの出来事についての話をさせ、その内容を文字で提示し、文字を読みながら文を検討する。最初は文の数が三つになっているかに注目させ(指導Ⅰ期)、次に文の要素がそろっているか(指導Ⅱ期)、内容が繋がっているか(指導Ⅲ期)と徐々に検討のレベルを上げていった。

分析方法: 課題についての談話を IC レコーダーで録音したものと授業中の発語を逐語記録にしたものを、以下の視点で分析する。

- ① 談話の文の数がどのように変化したか。
- ② 談話の構成がどのように変化したか。
 - ・ 概要、具体的内容、感想の三要素の入り方がどのように変化したか。
 - ・ 上記の順序がどのようにになっているかが。
- ③ 自分の談話の何に着目しているか。

(結果)

(1) 文の数と文に関係した発話

文の数は、指導3回目で3文となった。その後は最初の談話が2文になったり4、5文になったりしても、検討することで、自力で3文にまとめることができた。

文についての発話は指導Ⅰ期(1～9回)が20、指導Ⅱ期(10～15回)が26、指導Ⅲ期(16～23回)が39と指導が進むにつれて増えてきた。

(2) 文の構成

文の構成は、図1のように指導が進むにつれて、要素がそろそろようになり、さらに内容も最後の乾燥まで文脈がつながるようになってきた。

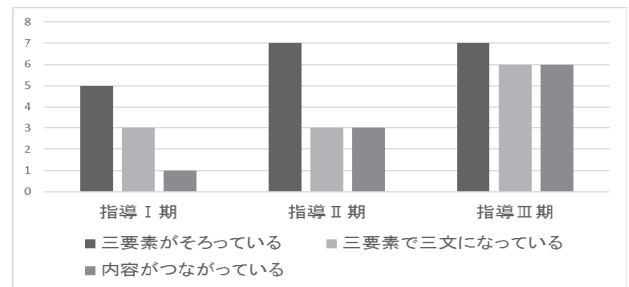


図1 文の構成の変化

(3) 文に対する意識

文に関係した発話の内容を見てみると、指導Ⅰ期は文の数についてのものが多かったが、検討の視点が「構成」や「内容」と深くなるにつれて、本児の発話も構成から内容に関する発話に変化していた。

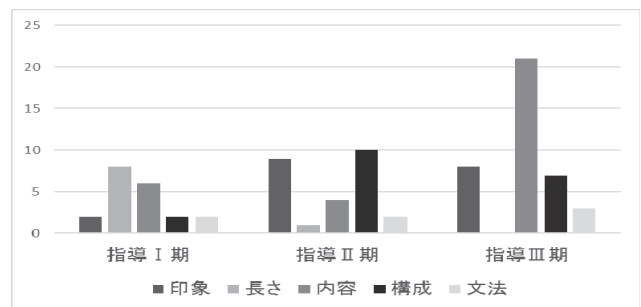


図2 文についての発話の変化

(考察)

文の数については、比較的早く意識することができるようになったが、文の要素の中で具体的内容や感想が重複しがちであったが、内容のつながりについて考えるように指導したことで、重複が少なくなった。これは、内容に着目したことで、本児が言いたいことをまとめようとする意識を持つことができた結果と考える。

また、本児の発話を見ると、指導段階の変化と発話の内容が同じようになっていることが分かる。特に、指導Ⅱ期で漠然と印象としてしか語られなかった内容の違和感について、教師が視点を与えることで意識ができたと考える。

これらのことはある程度決まった形式を使うことが、話をまとめる力をつけるために有効であることを示唆していると考えられる。

(Akimoto Koji)